

# 海を詠う

岩井圭也

## 第六話

夕日が沈みきるまで、わたしは揺り椅子に揺られていた。いったん座ってしまえば、他の部屋の住人が廊下を通っても、さほど気にならなかった。日が沈むと廊下に闇が立ちこめた。

伊藤さんが帰って来たのは、午後七時過ぎだった。わたしの顔を見るなり、「待たせたね」と微笑した。

「衣巻さんが下でビールを買ってきたせいで、酒盛りになってね」

「三人で？」

「すぐに何人か来たから、入れ違いに抜けてきた」

伊藤さんの白い顔に、酔いの色はなかった。部屋は廊下を進み、階段で二階に上って二番目だった。伊藤さんが板扉の鍵穴に鍵をさす。かちやり、と小気味よい音がして解錠される。部屋の鍵は一本しかない、と伊藤さんが言っていた。それが事実かどうかはどうでもいい。いずれにせよ、わたしのために合鍵を作るつもりはないらしい。った。

部屋は前のアパートよりも広い。二間続きで、手前は居間であり

書斎、奥は寝室になっている。書斎の天井から垂れている電球をつけると、白々とした光が部屋を照らした。

「今夜はどうするの？」

背後から伊藤さんの声がした。

「泊まっついていても？」

質問しているのは形だけだった。

「もう少し、外泊は控えたらどうだ。クラさんも心配するだろう」

伊藤さんの返事もまた、うわべのものだった。

「あの人が、わたしを可愛がっているとでも？」

「そうでなくても世間体があるだろう」

「わたしと義姉さんは、違う世間で暮らしているんです。だから、いつまでも会話が噛み合わない」

おなか<sup>す</sup>が空いた、と言おうとして振り返ると、正面から伊藤さんに抱きすくめられた。ビールの匂いが鼻をかすめた。

「ちよっと」

「待たせて済まなかった」

伊藤さんの熱い両手が、わたしの背中に回された。背筋を指でなぞられると寒気<sup>さむけ</sup>がする。その反応が面白いのか、二度三度と、人差し指が背中のくぼみを行き来した。

「ごはんでも食べませんか？」

「気分じゃないんだ」

寝室の布団は、敷きっぱなしだった。観念して仰向けに寝転ぶ。伊藤さんが覆いかぶさる。逆光になって、伊藤さんの顔は黒く塗りつぶされていた。

「ちかちゃん」

熱い吐息が耳から体内へ入りこみ、わたしの血を温めていく。

初めては、今年の一月だった。

いつものように、わたしは伊藤さんのアパートに昼過ぎから夜遅くまで居座っていた。義姉と顔を合わせたくなって、それまでもすでに何度か泊まっていた。でも、寝る時は別々の部屋だったし、伊藤さんがそういう目でわたしを見るそぶりもなかった。

ただその夜は、いつもと勝手が違った。

夕方、伊藤さんはいったん部屋を出ていった。誰と飲むのかわからないけど、忘年会、とだけ言い残してアパートを出て行った。部屋の主が不在のあいだは、翻訳を進めたり、雑誌を読んだり、手慰みに文章を書いたりして過ごした。夕飯は、近くの蕎麦屋で適当に済ませた。銭湯に行こうか迷ったけど億劫でやめた。師走の寒い夜で、冷気が頬の産毛を逆立てた。火鉢に火を入れ、伊藤さんの半纏を借りて過ごした。

部屋の主が帰ってきたときには、九時を過ぎていた。わたしは眠くなるどころか、夜が深まるにつれて目が冴えていた。

——おかえりなさい。

うん、と答える伊藤さんは、目の周りを赤くしていた。ずいぶん飲んできたんだな、と一目でわかった。全身から強い酒精の匂いを放つ伊藤さんは、外套がいのとうを脱いでシャツ姿になり、居間にどかりと尻を落とした。目が据わっていた。

——ちかちゃん。

わたしを呼ぶ声はしわがれていた。いつになく声高こわだかに話し合ってきたのだろう。ふだんの伊藤さんは、酒席の輪の外から騒々しい会話をぼんやり見ていることが多く、大声で意見を述べるような場面は見たことがない。いつもとなにかが違った。はい、と応じる声が震えた。

——詩人としての伊藤整は、すでに死んでいるそうだ。

そのひと言で、どんな話をしたのかだいたい察しがついた。

——そんなこと……。

——きみも馬鹿ばかにしているんだろう？

伊藤さんはわたしを遮さへって、さらに顔を近づけた。

——内心では、古臭い文学に固執こじつする自然主義者だと、侮あなごっているんだろう。

——勘違いです。

うるさい、という伊藤さんの声は、ひどくか細かった。叱られた子どもが拗ねるように、うなだれ、何事かをぶつぶつとつぶやいていたが、やがて顔を上げると、ちかちゃん、とまた名前を呼んだ。

——詩はまだ書いているのかい？

まあ、と曖昧な返事しかできなかった。伊藤さんにはやりと笑い、わたしの右肩に手を置いた。むっとする酒気が、鼻をついた。

——きみの詩は、詩ではないからね。

頭に血が上がった。なにか反論しようとしたが、伊藤さんの口で口をふさがれた。ねばっこい舌が口内に侵入してきた。わたしは目を剥いて、身を固くすることしかできなかった。炭にかざしたように、耳が熱かった。

じき、伊藤さんが顔を離した。唾液がわたしたちの口と口をつないですぐにちぎれた。

——どうする？

質問の意味がわからず、顔を伏せていると、伊藤さんが足を踏み鳴らして寝室に移動した。畳んでいた布団を乱暴に敷くと、居間に戻ってきて、後ろからわたしの肩を抱いた。眼鏡をはずされ、無言のうち布団へと誘導された。そのあいだも、伊藤さんはずっとなにかをつぶやいていた。

敷き布団の上に仰向けに寝かされたとき、一瞬だけ聞き取れた。

——ちかちゃんは詩人ではない。

わたしというより、伊藤さん自身に言い聞かせているような声こわね音  
だった。

その夜、初めて伊藤さんに抱かれた。無我夢中で、甘やかさを感じる暇もなかった。身体のいたるところがきしんで、音を立てた。行為が終わると、伊藤さんはわたしの頭を撫でてくれた。

——ずっと、いまのまままでいてね。

その言葉の意味を咀嚼そしやくするには、疲れすぎていた。ただ素直にならずくと、伊藤さんは満足げに微笑んだ。

六月に入っすぐ、昼過ぎに銀座の屋根裏部屋を訪ねると、妙ににぎわっていた。三畳間には兄と伊藤さん、衣巻さんといった常連たちが五人も集まって、一冊の雑誌を回し読みしながら話し合っていた。

みんなが読んでいるのは〈新潮しんちよう〉の最新号だった。

「みなさん、おそろいで」

「ちかちゃんか」と振り返ったのは衣巻さんだった。

「どうかされたんですか？」

「伊藤の小説への批評が載ったんだ」

書いたのは自分でもないのに、衣巻さんは自慢げに「川端康成だよ」と付け加えた。川端康成という作家の名前は知っていた。少し前まで連載していた、あさくさくれないだん〈浅草紅団〉という新聞小説が評判になっていた。

畳に腰を下ろすと、衣巻さんがわたしに〈新潮〉を渡してくれた。〈新人才華しんじんさいか〉という時評欄で、伊藤さんが昨月発表した〈感情細胞の断面〉が、真っ先に取り上げられていた。

——この作品の手法が新しいのであるが、その新しさが消化されてゐるのである。

ずいぶんな称賛だった。読み進めるうちに胸が高鳴って、体温が上昇していく。顔を上げると、兄も仲間たちも、そろって興奮で顔を赤らめていた。仲間が文壇の中央で活躍する作家の目に留まったという誇らしさが、狭い三畳間を覆っていた。

だが、当の伊藤さんはいたって冷静だった。「やったぞ、整」と兄に肩を抱かれながら、穏やかにうなずくだけだった。

「なんだ、うれしくないのか？」

浮かない表情の伊藤さんに、衣巻さんがからんだ。

「もちろんうれしいよ」

「なら、もっとうれしそうにしたらどうだ」

「あいにく、生まれつき感情が出にくい性分だね」

「それなら無理にでも喜んでくれ。おれたちのために」

もはや難癖なんくせとしか言いようがない。伊藤さんは「困るな」と苦笑するだけだった。

なんとなく、伊藤さんはわたしと目が合うのを避さけている節があった。こちらが凝視ぎょうししても、一向に振り向いてくれない。不自然なほど視線がぶつからない。仲間たちに囲まれているのに、早くひとりになりたそうだった。

そのとき、誰かが階段を上ってくる足音がした。はっ、と兄が階段の降り口を見やる。お酒が入ったりして騒さわぎすぎると、たまに一階の酒屋さんから怒られることがある、と言っていた。

だが、顔を見せたのは酒屋の主人でも奥さんでもなかった。兄たちと同世代と思しき、瘦やせた男の人だった。小さい顔の上で、彫りの深い両目と、くつきりとした鼻筋が存在を主張している。黒々とした豊かな毛は後ろに流されていた。最初に声をかけたのは、やはり衣巻さんだった。

「なんだ、北園か」

北園克衛という名前が、目の前の男の人とつながった。この人が、二階に住んでいる北園克衛。

「騒さわ々しいな」

北園さんは一座を見渡し、息を吐いた。まったく悪びれる様子な



く、兄が「申し訳ない」と詫びた。

「整の小説が、川端康成に評されたんだ」

「へえ。大したものだ」

言葉の割に、北園さんの言い方には感動がなかった。「読んでみろよ」と衣巻さんに〈新潮〉を押し付けられた北園さんは、黙ってわたしの横に腰を下ろした。三畳間はぎゅうぎゅう詰め、北園さんの腕がわたしのシャツの袖を擦った。

わたしの居心地悪そうな顔つきに気付いたのか、兄が「おや」と言っただ。

「ちかは、北園さんと会うのは初めてか？」

「ええ。作品は拝読したことがあるんですけど……」

言いながら北園さんの顔をうかがってみたけれど、彼は振り向きもせずに、雑誌を読みふけている。こちらなど眼中にないかのようだった。ふてぶてしさに内心で毒を吐く。伊藤さんなら、絶対に無視などせず微笑んでくれるのに。

兄の紹介によれば、北園さんは伊勢いせの出身らしい。歳は数えて二十九というから、わたしの九つ上だ。〈文芸耽美〉ぶんげいたんびや〈衣裳の太陽〉いしやうたいようといった雑誌で、実験的な作品を発表しているのだという。

兄が話しているあいだも、北園さんは微動だにしなかった。兄が「北園さん」と呼んでようやく、「ん？」と顔を上げた。

「きみの話をしているんだぞ」

「ああ、そうか」

「横にいるのはぼくの妹だ」

初めて北園さんと目が合った。静かに燃えるような、力強い視線だった。とっさに頭を下げた。

「よろしくお願いします。川崎愛かわさきちかといいます。左川ちかの筆名で書いています」

「どうも」

北園さんは軽く会釈して、また雑誌に戻った。十五分ほど目を通していたが、だしぬけに「ありがとう」とその場にいた仲間に雑誌を突き返すと、音もなく立ち上がった。

「もう戻るのか？」

衣巻さんの問いかけに、「あんまり騒ぎすぎるなよ」と言い残し、北園さんは二階へ降りていった。座っているときは気付かなかったけど、案外背が高いんだな、と後ろ姿を見ながら思った。

それが、北園克衛との最初の対面だった。

翌週、仕事が休みの日に屋根裏部屋へ顔を出してみると、めずらしい取り合わせのふたりがいた。伊藤さんが難しい顔で原稿をにらんでいるのはいつも通りだが、その後ろで寝そべてて写真集を見て

いるのは、北園さんだった。本はどこかちやちなつくりで、モデルの人種から欧米の写真集と察せられた。

ふたりは同時にわたしを見た。

「ちかちゃんか」と言ってくれた伊藤さんとは対照的に、北園さんはわたしを一瞥して、すぐに写真集へ視線を戻した。

はつきり言って、北園さんは邪魔者だった。彼がいなければ、この三畳間に伊藤さんとふたりきりになれる。別にいかがわしいことをしようとは思わないけど、ちよつとした睦みあい程度はできる。

——そうだ。

ちよつとした案をひらめいた。しつこく話しかければ、北園さんはうつつうしがって退散するのではないか。伊藤さんとふたりきりになる時間は、長いほどいい。さつそく実行に移すことにした。

「なんですか、それ」

最初、北園さんは自分が話しかけられていると思わなかったようだ。しばし黙っていたが、わたしの顔を見て怪訝けげんそうに眉をひそめた。

「なにか用？」

「その写真集、なにかなと思つて」

「マン・レイ」

応答は短かった。

「なんですか、まんれいって」

「人の名前。アメリカの写真家。シュルレアリスム運動の旗手」

「シュルレアリスム、つて？」

わたしは母親にものを問う幼児のように、質問を連発した。ダダイズムとはなにか、ブルトンとは誰か、バウハウスの果たした役割は。そうした質問に、北園さんは寝そべったまま端的に答えていく。すぐに面倒がるだろうと思っていたのだが、意外にも北園さんは辛抱強かった。それどころか、なにを問うても答えが返ってくることに、だんだんわたしのほうが楽しくなっていた。

「北園さんは、超現実主義者なんだよ」

「つつい、という感じで、伊藤さんが話に入ってきた。」

「北園さんの作品を読み解きたければ、フロイトを勉強したほうがいい」

「伊藤のほうがあからさまに影響を受けているだろう。このあいだ発表した小説なんか、丸きりそうだ」

てつきりふたりはほとんど接点がないのかと思っていたが、親しげに言葉を交わしていた。ただし北園さんの反応はいちいち正直で、「超現実主義者」と言われたとたん、あらゆるレッテル貼りを厭うように顔をしかめた。

「左川さんも精神分析に興味あるのか？」

頼杖ほおづえをついた北園さんが、目を細めていた。あまり熱心に質問をしたせいで、勘違いしているようだ。

「いや、そんな……」

「あんた、詩を書くんだってな」

どくつ、と心臓が飛び跳ねた。北園さんが身を起こす。

「川崎から聞いた。身内にも見せたことないんだって？」

「詩とも呼べないような代物なので」

「文字が連なっていれば、それは詩だ。書いた以上は、発表しなければ存在しないも同然だ。それを詩と見るか、小説と見るか、あるいは別の表現形式と見るか、作者が規定する必要はない。文章は、ただ文章としてそこにある。既存の表現と重なっている必要はなく、それが詩と呼ぶにふさわしければ、勝手にそう呼ばれる」

あぐらをかいた北園さんは、熱っぽい口調で語った。一方の伊藤さんは、さっきまでの会話が嘘うそのように、ひっそりと原稿読みに戻っていた。

「いま、原稿はあるか？」

「持ち歩いているわけではないので……」

「なら、持つてくるといい。余人と違う意見を、多少なりとも伝えられるかもしれない」

わたしは徐々に、北園克衛という男性を理解しはじめていた。こ

の人は言動に愛想こそないが、とても面倒見がいい。それに勉強家だ。

「次に来的时候は持ってきます」

北園さんの左手の指先は、マン・レイの写真集をなぞっていた。写真に写った白人の女性が、いまにも喘ぎだしそうだった。

「おれはだいたい、二階の部屋にいるから」

訪ねてこい、という意味だろう。「わかりました」と答えると、会話は途切れ、北園さんはまた写真集を眺めはじめた。途端に居心地が悪くなり、さも用事を思い出したようなふりをして屋根裏部屋を出た。退散させるつもりが、自分が退散する羽目になった。

階段を下りながら、去り際に見た伊藤さんの横顔を思い出していた。

黒目だけこちらに向けたその視線は、冬の鉄釘てつくわのように鋭かった。

次の休みの日、さっそく、原稿を携えて木造三階建てのアパートへやってきた。

三階の屋根裏部屋は無人だった。せめて兄がいてくれたら、と思っただけ、誰もいないのだからひとりで行くしかない。覚悟を決めて、二階へ降り、北園さんの部屋の板戸いぶしを拳で叩いた。

「はぐ」

野太い声が返ってきた。

「ちかです。川崎昇の妹の」

「入って」

そつと扉を開けると、北園さんが座卓に肘をついて煙草たばこを吸っていた。伊藤さん以外の男の人の部屋に立ち入るのは初めてだった。

部屋は片付いていて、衣類や原稿が床に散らばっている様子はない。背の高い本棚には本がびっしりと収納されていた。

北園さんは立ち上がりもせず、顔だけこちらに向けた。

「川崎昇の妹、なんて言わなくていい」

「はい？」

「左川ちか、つて筆名があるんだろ。そう名乗れば十分だ」

その言葉に胸を衝つかれた。

わたしは東京に来てからずっと、「川崎昇の妹」としてやってきた。そう名乗らなければ、誰も認識してくれないから。だいたい、初対面の文学者はわたしに警戒心に満ちた視線を投げかける。だが「川崎昇の妹」であることを明かすと、なあんだ、とでも言いたげに眉間みけんの皺を解くのだ。「川崎昇の妹」であることは、この街での処世術おとしだった。だがそれは、言い換えれば、左川ちかという名を貶めることだった。

「……あ、はい」

言葉が喉につつかえ、満足な答えを返せないまま、北園さんの隣に腰を下ろした。

「持つてきました。原稿」

「見せてくれるか」

北園さんが分厚い灰皿で煙草をもみ消し、右手を差し伸べる。筋張った、細くて長い指。見ているだけで体温が上昇するような指だった。

封筒から原稿を取り出す間際、伊藤さんの鬼面を思い出した。赤黒く充血した顔で、怒声を浴びせる伊藤さん。北園さんも同じような顔をするのだろうか。怯みかけた心を鼓舞して、えいやつ、と差し出す。たとえ怒られても構わない。このまま「川崎昇の妹」としてつがなく生活を終えるくらいなら、面罵めんばされたほうがまだ。

北園さんは無言で受け取り、座卓に原稿を置いた。渡したのは、今年に入ってから書いた〈青い馬〉という詩だった。

馬は山をかけ下りて発狂した。その日から彼女は青い食物をたべる。夏は女達の日や袖を青く染めると街の広場で楽しく廻転かいてんする。

テラスのお客達はあんなにシガレットを吸ふのでブリキのやうな空は女の頭の落書きがいくつも残る。悲しい記憶は手巾しほかんのやうに捨てようと思ふ。恋や悔恨やエナメルの靴を忘れることが出来たら！



私は二階から飛び下りないで済んだのだ。  
海が天にあがる。

人が原稿を読んでいる時間というのは、どうしても緊張するのだろう。いつそ席をはずせばよかった。そんなことを思いながら、北園さんが読み終わるのを待った。一階の酒屋から、客と主人が会話する気配が聞こえた。窓からは初夏の日差しが差しこみ、額や腋に汗を滲ませた。

五分ほど原稿に目を落としていた北園さんは、うつむいたまま数秒瞑目して、瞼を開き、こちらに向き直った。

「他の誰かに、この詩を見せたか？」

「いいえ」と即答した。北園さんは納得したようにひとつうなずいた。

「いま、仲間と一緒に〈白紙〉という雑誌をやっている」

「はあ」

「そこに〈青い馬〉を掲載する。いいね？」

なにを問われているのかわからず、ぽかんとして、それから「えっ」と声が出た。

「その、掲載って……」

「この詩は傑作だ。おれが保証する。これは絶対に世に出さないと

いけない」

<u><u>